

二〇一七年十二月

「今月の言葉」と「今月の聖語」についての紹介

今月の言葉

歩んでいても、とどまっていなくても、ひとの命は昼夜に過ぎ去り、とどまりはしない。

—河の水流のようなものがある。

『ウターナヴァルガ』

早いもので十二月に入り、今年も残すところ一ヶ月となりました。一年経つのがあつという間な気がします。今月の言葉のように私たちの命には限りがあり、河の流れのようにとどまることをありません。私たちは、ついついそうした現実を忘れてしまっているのではないのでしょうか。命は今日限りだという思いを持ってば、やらなければならぬ目の前のことに對しても、後回しにせずに「いますぐやろう」という気持ちになり、すぐ行動できると思います。命だけでなく、月日もとどまることなく過ぎ去っていきます。以前からやろうと思っていたこと、いまやらなければならぬことがあれば、年が明けからではなく、今年中に実行してみましよう。

今月の聖語

「愚者三人に智者一人」とて、何事も談合すれば面白き」とあるぞ。

『蓮如上人後一代記聞書』

よくニュースで「談合」という言葉を耳にします。競争入札をする前に、業者同士が事前に話し合い、落札者と落札価格を前もって決めるといふ、不公正な話し合いを指します。本来、「談合」とは「皆で寄り集まって話すこと」を意味します。

今月の聖語は蓮如上人の言葉ですが、愚者三人でも智者一人分の知恵が出るように、仲間と寄り合つて話し合うことにより、良い知恵も浮かびます。一般的によく耳にする「三人寄れば文殊の知恵」と同じたとえです。自分ひとりでは、なかなか良い知恵が浮かばないことがあります。一人では考え方も狭まってしまうますが、そんなときに他の人の意見を聞き、人と話すことで広い視野で考えることができます。

ところで「三人」という人数ですが、話し手と聞き手、そしてそれを客観的に見る人という、非常にバランスのとれた形だそうです。二人だと意見の対立が起る場合があるかもしれませんが、そんなときに客観的に見る人がいれば、話がこじれることは少ないでしょう。

どちらにしても、一人で考えて良い案が浮かばないときは、積極的に談合してみてもいいでしょう。